

令和5年11月28日

南の風 495

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

鈴木氏の考えの続きになります。

ある選手がディフェンスのスキルをもっと磨きたいと思っているとします。しかし一生懸命に練習しているのになかなか成果が出ません。練習は成果を出して初めて意味を持ちます。高い意識を持った選手だからこそ、いつまでも成果の出ない練習をしていれば、やがて意欲は薄れてしまうでしょう。

原因はディフェンスについての情報や知識が足りなくなっているためだと分かりました。もっと良い練習や良い考え方があるのなら、コーチはさらに学習していけるチャンスを与えてあげなければなりません。これが継続学習です。

例えば、選手がどうにかしたいと思い自主的にクリニックのようなものに参加したとします。これは選手が自分で責任を果たそうとしている歓迎すべき行動です。しかしコーチにもプライドがあり「そんなことは許さない」ということになりがちです。

コーチの知識や情報が選手のレベルに見合ったディフェンスを指導できないのなら、何か別の方法を選手に提案しなければなりません。

海外の強豪国では、自分の力を伸ばすためにチームのコーチ以外の指導者に学びに行く機会が開かれていたり、年代ごとにチームがあって、いろいろなコーチから学びながら成長していく機会が作られたりしています。

日本でも、もっと選手に成長の責任を与え、それに見合った継続学習の機会を作っていく必要があるのです。

責任を果たす選手に育てる方法の4つ目が「信頼」です。責任感のある選手に育てたいと考えるなら、まずはコーチが「選手は責任を果たしてくれるはずだ」と信頼し、それが選手に伝わっていないとすればなりません。この前提があるから選手もコーチを信頼し、全力で自分の責任を果たそうとするのです。もしコーチからの信頼が軽ければ、選手は自分の責任も同程度に軽いものだと考えるでしょう。それがコーチへの不信感になることさえあります。

わたしが指導していた選手の中には、日頃の素行が悪く、学校でも問題行動を起こしてしまうような者がいました。バスケットボールのスキルは非常に高いものを持っていましたが、周りへの気配りや協調性に問題があり、チームでも周りの選手に対して不平不満をぶつけていたのです。彼を否定的な姿勢で扱ってしまうことは簡単ですが、私は彼の成長に貢献することを決意し、彼を信じることから始めました。

まず彼に役割を与え、チームのためにそれを果たしてほしいと頼んだのです。そして君ならばそれを達成してくれると信じていると伝えました。最初は、その期待に応えようと彼はポジティブな行動を起こしてくれました。もちろんそう簡単には人間が根本的に変わる訳はありません。時々、その責任に背いた行動をとってしまうこともありました。次号にします。